

「鄧氏復活」の意味するもの

北京の政治的気流が大きく動きはじめた。去る七月上旬に北京で科学院の工作者会議が開かれていたというニュースに接したとき、私はもしかすると鄧小平氏がこの会議に出て指導的役割を演じているのではないかと思った。少なくとも、この科学院の会議が科学・技術政策にかんする鄧小平氏の綱領、つまり毛沢東以後の中国の方向を規定するために一九七五年秋につくられた三大綱領（「四人組」時代には「三株毒草」だとして集中的に攻撃された）の一つ、「科学院の工作報告の綱領」の政策方針に沿ったものであることはもはや疑いなく状況にある。それほどまでに、今日の中国内政の方向は、大きく、しかも根本的に変化しており、理論的・政策的には、もはや完全に鄧小平路線が復活していったのである。このころは、去る四月五月の「工業は大慶に学ぶ全国会議」にも歴然としており、「三株毒草」といわ

れた鄧小平氏の他の二つの綱領（「総綱論」と「工業二十条」）が今日さかんに引用され、評価されているところからも明白である（たとえば、七月八日付「人民

沢東思想」に依拠した階級闘争」）。中心の社会主義建設、人間の主体的能动性を激吹する大衆動員方式の社会主義建設の思惟が陪せいに気がついたとき、中国は

だつすれば、鄧小平復活が本年初頭以来、様々なかたちで予測され、中国要人もしばしばこの革派非上海グループと旧実権派

は、今日の中国が当面する根本的な政治的矛盾と深部の潮流、そして、中国の政治文化の特質をほとんど理解し得ていないものであつて、華國鋒体制にして状況はそ

では、中国が当面する根本的な政治的矛盾とはなにか。それはつまり、毛沢東路線をかけたながら毛沢東路線から実質的に離脱しようとする今日の状況がもつ矛盾で

このように考えたとき、鄧小平再復活の政治的・社会的意味はあまりにも大きいだけに、中国指導部内にはまだ不透明な状況が残っているのである。去る十九日に北京に張り出された壁新聞が対外経済連絡省というもともと鄧小平路線を必要とする部署のものであること、鄧小平再復活を歓迎する意

なによりも党官僚としての大きな実力と基盤を考えたとき、あえて中国社会現代化のために、毛沢東神話を打ちくだき、「大躍進」政策や文化大革命は誤りであったといふ得る人物、つまり、毛沢東批判を敢行できる人物こそ、かつ

中嶋 嶺雄



「異議申し立て者」登場

「次のステップ」は何か

日報」の向群署名論文「復活の旗印をかかげて復活をおこなう」「四人組」の「総綱論」にたいする批判を批判する」。

「工業、農業、国防、科学、技術の四つの現代化」を中心とする近代的な工業大系の整備・建設に本格的に乗り出さねばならないはずである」（本紙五年八月十二日）と、いまや中国は政策的には完全にこのような周恩来「鄧小平路線を歩みはじめているのであ

のほなせであらうか。昨年四月の天安門事件の責任を「手にかがせられて、四月七日付の党中央決議で彼を「反革命分子」として処断

一部には華・鄧体制と鄧小平の両輪にならぬか、毛沢東死後のときと同様に、またもや集団的な事実にあたるだけに、手続き上

あり、「四人組」を罵（ば）倒し、とくに江青夫人を中世の魔女狩りのように誹謗の根源として集団的に論難しなから、依然として

そのものへの有力な「異議申し立て者」なのである。しかも、自らの政治的ポストにこだわらぬがゆえに、これまで注目を浴びてきた鄧小平氏（東京外語大教授）

散去されたか、鄧再復活はまた決定的ではないという打ち消し談話が部に出たことなどは、このよう

る批判を批判する」。

「工業、農業、国防、科学、技術の四つの現代化」を中心とする近代的な工業大系の整備・建設に本格的に乗り出さねばならないはずである」（本紙五年八月十二日）と、いまや中国は政策的には完全にこのような周恩来「鄧小平路線を歩みはじめているのであ

のほなせであらうか。昨年四月の天安門事件の責任を「手にかがせられて、四月七日付の党中央決議で彼を「反革命分子」として処断

一部には華・鄧体制と鄧小平の両輪にならぬか、毛沢東死後のときと同様に、またもや集団的な事実にあたるだけに、手続き上

あり、「四人組」を罵（ば）倒し、とくに江青夫人を中世の魔女狩りのように誹謗の根源として集団的に論難しなから、依然として

そのものへの有力な「異議申し立て者」なのである。しかも、自らの政治的ポストにこだわらぬがゆえに、これまで注目を浴びてきた鄧小平氏（東京外語大教授）

散去されたか、鄧再復活はまた決定的ではないという打ち消し談話が部に出たことなどは、このよう

る批判を批判する」。